⑧ 水辺のトンボ

今回指標種に選定されたトンボは、愛知県の都市部周辺でも観察できる種が多く含まれます。しかし愛知県のトンボを取り巻く環境はほぼ悪化の一途をたどっています。特に池のトンボの減少は著しく、埋め立てや植生の破壊、外来生物による捕食、毒性の強い農薬の導入などが主要因となっています。

指標種の探し方について解説します。

ハグロトンボは河川や用水路の水草のある緩やかな流れに生息します。羽化したばかりの成虫は岸辺付近のやや薄暗い林内に群れる性質があります。

キイトトンボは植物の多い湿地や池沼の浅い部位に生息します。未成熟な成虫はあまり水辺から離れず、日当たりの良い林縁などで見られます。

ギンヤンマは開放的な池沼や湿地、水田などに広く見られます。メスは水面に浮かぶ植物に産卵するので、植物の無い池では見られません。

チョウトンボは開放的な池沼で見られます。ヒシなどの浮葉植物のある水域で産卵するので、浮葉植物のない池には生息できません。

アキアカネは稲刈りの終わった水田の水溜まりなどのごく浅い水域で産卵します。成虫の休息場所は産卵場所とは離れていることが多く、都市部の公園などで見かけることがあります。公園の桜などの枝先に静止している姿が以前はごく普通に観察できましたが、現在は少数しか見られません。

ハッチョウトンボは比較的自然度の高いモウセンゴケなどのある湿地に生息します。年中水がしみ出し、水温の上がらない環境でしか見られません。

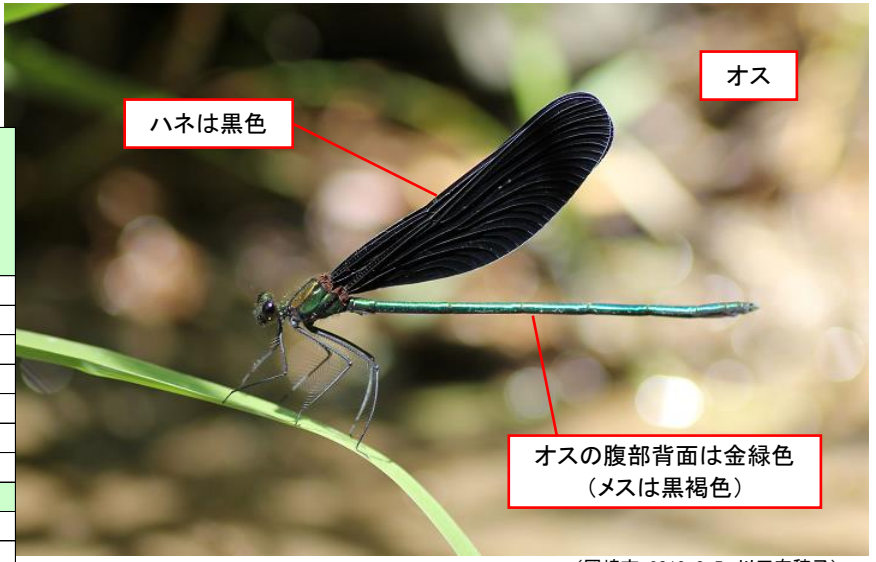
シオカラトンボは池沼や湿地のトンボですが、水生植物がなくても水底に泥が溜まっていれば生息可能です。幼虫が泥に潜って生活するためです。

トンボは大型の昆虫なので肉眼でも簡単に種類を見分けられます。身近な池や川などでトンボを探してみてください。池の場合は水生植物のない池ではなく、植物の多い池を探してください。水生植物は多くのトンボの産卵場所であり、またヤゴの生息場所にもなるので、出会いやすくなります。

水生植物の多い池

水生植物の無い池

調査テーマ
①
②
③
④
⑤
⑥
⑦
⑧
⑨
⑩
⑪
⑫
⑬
⑭
⑮



（岡崎市, 2012-8-5, 川田奈穂子）

ハグロトンボ　トンボ目　カワトンボ科

Atrocalopteryx atrata (Selys)

漆黒（しっこく）の妖精（ようせい）

調査しやすい月
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
1
2

【 形　態 】
体長 54～68mm。黒色のハネを持つ中型のカワトンボ。オスの体色は黒色で腹部の背面は金緑色、メスは黒褐色。

【 分布と生態 】
本州、四国、九州に分布する。成虫は5～10 月に見られるが、7、8 月に多い。1～2 年で 1 世代。

【 さがすポイント 】
平地から丘陵地にある河川や用水路などに生息する。抽水植物や沈水植物のある緩やかな流れを好む。成熟したオスは川の植物や石などに止まり、縄張り占有する。未成熟な成虫は川周辺の林内などの薄暗い環境で群れることが多い。

【 よく似た種 】
アオハダトンボに似るが、オスは腹部の腹面後端に白色斑紋が無いこと、メスはハネが全面黒色であることで区別できる。

【 参考資料 】　県 GDB②p.D-258

名前の通りハネの黒いカワトンボの仲間で、「御歯黒蜻蛉」とも呼ばれます。「カワ」のトンボなので河川の中流・下流域、用水路で見られます。他のトンボに比べると水質悪化にも多少強く、都市部の河川に生息していることがあります。例えば汚染がひどいとされる名古屋市の庄内川でも姿が見られるほどです。未成熟な成虫は、多くの場合河川の周辺にある林内の薄暗がりに群れています。成熟した成虫は川伝いにかなり移動することもあり、発生地とは離れた川で見られることもあります。成熟したオスは川の植物や石に止まってメスを待ちます。

（豊田市, 2017-7-6, 川田奈穂子）

キイトトンボ　トンボ目　イトトンボ科

Ceriagrion melanurum Selys

線（せん）は細（ほそ）いが、どう猛（もう）なイトトンボ

【 形　態 】

体長 31～48mm。黄色い大型のイトトンボ。オスの腹部は鮮やかな黄色、メスの腹部は黄色～緑色まで変異がある。

【 分布と生態 】

本州、四国、九州に分布する。成虫は5～10 月に見られるが、6～9 月に多い。1 年で1～2 世代。成熟したオスは水辺の植物に止まり、時々メスを探して飛翔する。未成熟な成虫は水辺周辺の林縁で見られることが多い。

【 さがすポイント 】

平地から山地にある池沼や湿地に生息する。抽水植物の多い浅い水域を好む。

【 よく似た種 】

オスは見間違える種なし。メスはベニイトトンボにやや似るが、腹部の色がキイトトンボは黄色～緑色、ベニイトトンボは橙褐色である。

抽水植物の多い湿地や池沼や水田周辺などで見られる大型のイトトンボです。成熟したオスは繁茂した浅瀬の植物の間を弾むように飛びながらメスを探します。キイトトンボの近縁種にベニイトトンボがいます。愛知県では両種が同じ場所に生息していることもありますが、ベニイトトンボの成熟オスの腹部は鮮やかな赤、それに対しキイトトンボは黄色なので見間違える心配はありません。ところでキイトトンボは細身の可憐な姿とは裏腹にどう猛な性質です。しばしば自分よりも小さなイトトンボを捕食し、時には共食いすることもあるほどです。

（岡崎市, 2018-8-17, 川田奈穂子）

ギンヤンマ　トンボ目　ヤンマ科

Anax parthenope (Selys)

トンボ界（かいと）の飛（や）ばし屋

【 形　態 】

体長 65～84mm。複眼と胸部が緑色、腹部の付け根が銀白色～水色となるヤンマ。成熟するにつれてハネに褐色部が拡がる。

【 分布と生態 】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島に広く分布する。成虫は 5～11 月に見られるが、6～9 月に多い。1 年で 1～2 世代。成熟したオスは開放的な水面を時々ホバリングしながらメスを探して飛翔する。黄昏時はオスとメスが入り混じって摂食飛翔する。

【 さがすポイント 】

平地から山地にある池沼や河川の淀み、水田などに生息する。プールのような人工水域でも水面に産卵できる植物があればヤゴの生育は可能。

【 よく似た種 】

クロスジギンヤンマに似るが、ギンヤンマには胸部に太い黒条がない。

日本人に名を知られたヤンマの双璧は「オニヤンマ」と「ギンヤンマ」です。ギンヤンマの「銀」は成虫オスの腹部の付け根の銀白色から名付けられました。ギンヤンマは高い飛翔力を持ち、高速で飛ぶ、ホバリングする、空中転回するなどお手のものです。さらに長距離を移動するのも得意で、時には数百 km を移動することもあるほどです。成虫は通常植生のある池沼などで見られますが、台風など南西からの風が吹き荒れた後は、池など全く無い市街地で姿を見かけることがあります。どうも遙か海の彼方から風に乗って多数が飛来しているようです。

（岡崎市, 2016-7-2, 川田奈穂子）

チョウトンボ　トンボ目　トンボ科

Rhyothemis fuliginosa Selys

ハネの輝（かがや）きが魅力的（みりょくてき）的

【 形　態 】

体長 31～42mm。全身およびハネの大部分が黒褐色のトンボ。オスのハネは青紫色、メスのハネは金緑色に輝く美麗種。

【 分布と生態 】

本州、四国、九州に分布する。成虫は5～10 月に見られるが、7～8 月に多い。1 年で1 世代。成熟したオスは岸辺の植物などに止まる、あるいは水面をひらひらと蝶のように飛びながらメスを探す。未成熟な成虫は水辺周辺の林縁などを高飛して摂食することが多い。

【 さがすポイント 】

平地から丘陵地にある抽水植物や浮葉植物の豊かな池沼に生息する。市街地の公園の池でも、ヒシなどがはえていれば生息することがある。

【 参考資料 】

県 GDB②p.D-261

ヒシなどの浮葉植物に産卵するため、そのような植物のある池ならば市街地でも観察できます。トンボの仲間でありながら「蝶」がついたトンボです。その由来はほとんどのトンボは直線的に飛ぶことが多いのに対し、チョウトンボは蝶のようにひらひらと飛ぶことも多いからです。ところでチョウトンボの魅力はハネの輝きです。オス・メスとも黒褐色のハネですが、太陽光を反射すると青紫や金緑色に輝き、言葉に表せないほどの美しさです。一見優雅なチョウトンボですが、いざとなれば、例えばメスを争ったオス同士は猛スピードで追尾飛翔する事もできます。

（岡崎市, 2018-11-5, 川田奈穂子）

アキアカネ　トンボ目　トンボ科

Sympetrum frequens (Selys)

ザ・田（た）んぼのトンボ

【 形　態 】

体長 32～46mm。アカトンボの仲間であり、オスは成熟すると腹部が赤化する。メスは腹部が赤化するものと、淡褐色のものがいる。ハネは透明。

【 分布と生態 】

北海道、本州、四国、九州に分布する。成虫は 6～12 月に見られるが、平野部では 9 月下旬～10 月に多い。1 年で 1 世代。水田などで初夏に羽化した成虫は涼しい高山に移動し、夏を過ごす。秋になると平地に移動し、水田の水溜まりなどで産卵する。

【 さがすポイント 】

平地から山地にある水田、湿地などに生息する。干上がりそうな浅い水域を好む。

【 よく似た種 】

アカトンボの仲間はよく似た種が多く、胸や頭の斑紋、脚の色、ハネの模様などで種を区別する。

愛知県には 10 種あまりのアカトンボの仲間が生息しています。その代表種といえばアキアカネです。初夏に平地や丘陵地の田んぼなどで羽化した成虫は高山へ移動して夏を過ごし、秋になると平野に降りて来ます。しかしそのような大移動をするのは実はアキアカネだけの生態です。1980 年代までは愛知県でも秋になると平野の市街地へ群れをなして飛来していました。しかし 1990 年代以降、田んぼに殺虫性の強い農薬が使われ、また水の管理変更もあって激減しました。田んぼという大事な住処を失ったアキアカネは減少せざるをえなかったのです。

（豊田市, 2017-7-25, 川田奈穂子）

ハッチョウトンボ　トンボ目　トンボ科

Nannophya pygmaea Rambur

湿地（しっち）に生（い）きる極小（ごくしょう）のトンボ

【 形　態 】

体長 17～21mm。世界で最も小さいトンボの一種である。未熟な成虫の体は橙色だが、成熟するとオスは赤化、メスは黄色と褐色の縞模様になる。ハネの基部は橙色。

【 分布と生態 】

本州、四国、九州に分布する。成虫は5～8 月に見られるが、6～7 月に多い。1 年で 1 世代程度と思われるが、正確な観察・飼育の報告例はない。未成熟な成虫は周辺の開けた草地、林縁などで生活し、成熟するとオスは湿地の植物に止まり,縄張りを形成し、他のオスが近づくと目にも留まらぬ飛翔で追い払おうとする。

【 さがすポイント 】

平地から丘陵地にある丈の低い植物のある湿地・湿原に生息する。また休耕田で見られる例も多い。一年中水の涸れない湿地にしか定着しない。

【 参考資料 】　県 GDB②p.D-259

ハッチョウトンボは愛知県に縁のあるトンボです。尾張の本草学者・大河内存真が『蟲類写集』に『日本では「ヤダノテツポウバハツチウメ」（矢田鉄砲場八丁目：現在の名古屋市の矢田川付近）にのみ発見せられる』と書いたことが名前の由来とされるためです。全国的にはハッチョウトンボの生息地は限られますが、愛知県にはまだ多くの生息地が残されています。その理由はハッチョウトンボが好むモウセンゴケなどのはえた湿地が多いためです。しかし平野部ではそのような環境はほぼ失われ、丘陵地に行かないと出会うことは難しくなっています。

（岡崎市, 2016-7-3, 川田奈穂子）

シオカラトンボ　トンボ目　トンボ科

Orthetrum albistylum (Selys)

生息域（せいそくいき）の広（ひろ）さは日本一（にほんいち）

【 形　態 】

体長 47～61mm のトンボ。未成熟な個体はオス･メスとも腹部が麦わら模様。オスは成熟すると腹部の前半が白粉を吹く。成熟したメスはわずかに白粉を吹く程度だが、まれにオスと同じように厚く白粉を吹く個体が見られる。

【 分布と生態 】

北海道、本州、四国、九州、南西諸島に広く分布する。成虫は 4～10 月に見られ、5～9 月に多い。1 年で 1～2 世代。

【 さがすポイント 】

平地から山地の田んぼ、池沼、湿地、河川の淀みなどに生息する。泥の溜まった浅い水域を好む。人工的なコンクリート張りの池や水路でも泥が溜まると見られることがある。

【 よく似た種 】

シオヤトンボに似るが、シオヤトンボは体長 48mm 以下と小型である。

愛知県はもちろん、日本で最も広く普通に見られるトンボです。一般にも広く名前が知られており、未成熟なオスとメス成虫はムギワラトンボという名で呼ばれるほど親しまれてきました。田んぼのように浅くて泥底の水域を好みます。フロンティアスピリットにあふれた種で新天地への進出能力が高く、人工的な環境への適応能力もあります。例えば市街地の公園に池が作られて泥が溜まるとしばしばシオカラトンボが最初に定着します。逆に自然度の高い池沼ではむしろ少なく、人間のそばで繁栄するトンボ界のカラスやスズメのような存在かもしれません。